

物価目標政策の意義と課題

渡 辺 努

目 次

- | | |
|---------------------|------------------|
| 1. はじめに | 4. 価格据え置き状態からの脱却 |
| 2. 日本における物価の現状と海外比較 | ＜質疑応答＞ |
| 3. 価格据え置きの常態化 | |

1. はじめに

東京大学で、物価や金融政策について研究しており、特に、ここ10年ほどは、物価について集中的に研究している。物価の研究は、CPI（消費者物価指数）のような公表された指標を使って様々な分析を行うことが主流だった。しかしながら、ここ10年ほどで大きく変わっており、集計する前の個別の商品やサービスの価格を入手して、それを分析するといったスタイルになっている。マクロ経済学全般にマイクロデータを使う動きが広まってきているが、その中で物価研究はやや出遅れていた。近年ようやく追いついてきている。私の研究も、マイクロデータを集めてきて、チームで分析を行っている。スタートは一橋大学

にいた頃の2006年で、5年間のプロジェクトを終了し、東京大学に移ってから、それを引き継ぐ形で5年間のプロジェクトとして研究を行った。そして、昨年からは「Central Bank Communication Design」というテーマで、5年間のプロジェクトを新たにスタートしている。マイクロのデータを集めるのは容易ではなくコストもかかるため、経済学においても、国や企業の支援を受けながら期間を区切ったプロジェクトとして研究を進める機会が多くなってきた。こういった流れは、どの分野においても普通になってきている。本日は、こういった研究の成果を踏まえて、物価目標政策の意義と課題という観点からお話をする。

東京大学で研究に携わる一方で、15年に、ナ



渡辺 努（わたなべ つとむ）

東京大学大学院経済学研究科長・経済学部長、(株)ナウキャスト創業者・技術顧問、東大日次物価プロジェクト代表者。1982年東京大学経済学部卒業、日本銀行入行、92年ハーバード大学Ph.D.（経済学専攻）、99年一橋大学経済研究所助教授、2002年同教授、11年東京大学大学院経済学研究科教授、19年4月より現職。

（本稿は2019年5月23日に日本証券アナリスト協会で開催された講演会の要旨である）